

目次

はしがき

序章 「日本人」は冒険・探検をどのように消費してきたか…………… I

1 「メディア・イベント」、「真正性」、「学術探検」、「物語」—— 「メディア」としての冒険・探検…………… I

2 戦前の冒険・探検をめぐる研究から見える論点…………… 3

「事業」としての冒険と「アドベンチャー」の語源 「メディア・イベント」としての冒
険・探検 冒険・探検の「真正性」に関する議論の登場 探検における「学術」の意義
「冒険小説」というメディアとそのオーディエンス

第I部 海外渡航自由化以前の冒険・探検——一九六四年まで

第1章 戦後日本の学術探検とマスメディアの関係…………… 17

——「冒険・探検」をめぐる学術／映画／観客／政治の欲望——

1 戦後日本における学術探検と記録映画…………… 17

大衆のための「探検記録映画」 戦後日本の海外エクスペディション 探検と学術およびマスメディアの関係性

2 映画『マナスルに立つ』と「ナショナルな欲望」／「真正性」 21

マナスルへの挑戦 戦後の記録映画ブームと『エヴェレスト征服』のインパクト 報道
カメラマンと劇場映画監督の融合 記録映画における「真正性」と「つまらなさ」の両義性
「ナショナルな欲望」ともう一つの「真正性」

3 「学術探検」と映画『カラコルム』 33

「学術探検」と映像製作者の意図 「ナショナルな欲望」「真正性」と「探検の疑似体験」の両立 「教養」としての学術探検映画

4 『マナスルに立つ』と『カラコルム』から見える一九五〇年代 40

『マナスルに立つ』と「五五年体制」への抗い 『カラコルム』と反戦・平和 戦前の探検記録映画との「断絶」と「連続性」

第2章 海外渡航解禁前（一九六四年以前）の「青年」冒険家たち……………47

——小田実と堀江謙一——

1 海外渡航解禁前（一九六四年以前）の冒険・探検 47

2 一九六〇年前後の冒険ブームと小田実 48

小田実の登場と『何でも見てやろう』 「虫瞰図」という視点 「教養としての冒険」とインテリ左派からの評価

3 堀江謙一の太平洋単独無寄港横断とその是非論争 56

堀江をめぐる論争の登場 冒険家の人格という論点 「真正性」への懐疑 「教養とし

ての冒険」という評価軸 「永遠の青年の姿」とトランスメディア

4 もうひとつの堀江評価 66

5 小田実と堀江謙一の共通点 68

第Ⅱ部 海外渡航自由化と「前人未踏の地」なき時代——一九六四～八〇年代

第3章 三浦雄一郎の「エベレスト大滑降」(一九七〇年)と大阪万博……………73

——「企業」としての冒険と日本の高度成長期——

1 「エベレスト大滑降」への挑戦 74

「エベレスト・スキー探検隊」の結成と「メディア・イベント」としての冒険 二つのエベレスト隊 一九五〇年代の「学術探検」との距離

2 「プロの冒険」に対する批判と称賛 78

「プロ」であることへの批判 「プロ」のイメージを変えろという戦略

3 「一九七〇年」の時代背景と「エベレスト・スキー滑降」の意義 82

「政治の季節」の中で 科学技術を駆使する冒険 万国博覧会とアポロ計画 「大滑降成功」とナショナルな欲望の接統 シェルパの死に対する「冒険批判」と経済格差の露呈

4 ドキュメンタリー映画化と「世界的英雄・三浦雄一郎」の誕生 92

石原プロによる冒険の映画化 “The Man Who Skied Down Everest”の成功 マスメディア・国家・資本を「飼いならした」三浦雄一郎

第4章 「自分探し」と「メディア・イベント」の狭間で……………99

——国民的英雄・植村直己の誕生——

1 植村直己と「単独行」の意義 99

墓石に刻まれた詩が語るもの 一九七〇年代の社会意識と「冒険」の意味づけ

2 「冒険家・書き手」植村直己の登場 102

「政治の季節」の終焉と「異質な若者」としての登場 メディア・イベント化する植村の

冒険 冒険に対する知識人の「意味づけ」の変化 「社会変革のための冒険」への哀愁

3 「ロマン主義」と「商業主義」との狭間で（一九七六―八〇年） 110

メディア・イベント化と「ロマン主義」の矛盾 本多勝一による植村批判 「植村評価」

と「植村批判」のアンビバレンス

4 「国民的英雄・植村直己」の誕生 118

植村の失敗と挫折 「真正な冒険家」という意味付け 学校教材としての植村直己の誕

生 教育問題の前景化と植村直己の消費 植村直己の「偉人化」

第5章 テレビ時代のスペクタクルな冒険・探検……………126

——「川口浩探検シリーズ」と「真正性」の変容——

1 テレビで観る「冒険・探検」の誕生 126

2 高度成長期の冒険・探検番組と川口浩 129

冒険番組「ショック!!」における「真正性」の強調 視聴者に与えるインパクトの重視

「教養的」ドキュメントではなく「血わき肉おどる」冒険・探検へ 「入れ込み」による

「真正性」「冒険・探検らしさ」の創出

第Ⅲ部 バブル崩壊後の多様化する冒険・探検——一九九〇年代

第6章 テレビバラエティ版『深夜特急』が残したもの……………167

1 猿岩石の冒険とは 167

——猿岩石の「ユーラシア大陸横断ヒッチハイク」——

テレビバラエティ版『深夜特急』という発想 猿岩石の冒険企画とその特徴 テレビ番組・新聞・書籍のメディアミックス化

2 番組についての称賛と酷評（やらせ発覚以前） 174

若者からの高評価 大人からの酷評と称賛

3 『猿岩石日記』のベストセラー化 176

出版企画と土屋敏男・堀越徹 書籍への高評価と意外な要因

3 『川口浩探検シリーズ』と「真正性」の変容 139

『川口浩探検シリーズ』の特徴 探検隊を語る言説の変容 「川口浩を笑う」という言説空間の形成 「やらせ問題」と「冒険・探検」へのバッシング

4 テレビ視聴の変容と「冒険・探検」 151

ドキュメントバラエティ的なテレビ視聴の誕生 牛山純一にとってのカップ 「スベクタクルな冒険・探検」を求める若者・子どもたち 後の冒険家・探検家たちに残したもの

5 『川口浩探検シリーズ』の人氣が示したもの 161

4 航空機利用の発覚以降の評価 181

マスメディアによる番組の「真正性」に関する論争 「やらせ」への評価と有識者の世代差 バブルの名残と「第三世界」へのあこがれ

5 冒険を批判する様々な視点 192

「教養の欠如」という視点 「若者の成長」という視点の齟齬

6 「猿岩石現象」が残したもの 197

第7章 インターネット社会における冒険家の栄光と転落……………201

——栗城史多と「冒険の共有」——

1 ネット社会における新しい冒険の形 201

2 栗城史多とは 203

芸能界志望から登山家へ エベレストでの凍傷から滑落死まで

3 栗城の冒険の特徴とメディアとの関係 206

「冒険の共有」とネット社会 著書の出版と「テレビドキュメンタリー」への露出 資金集めと「講演会」というメディア 冒険の中の過剰な演出 資

4 栗城の冒険スタイルと社会からの評価の変容 216

ネット空間における「アンチ栗城」の増殖 イモトアヤコというライバルの出現 最後のエベレスト挑戦

5 「栗城劇場」の閉幕と「栗城批判」が意味するもの 224

「単独」「無酸素」への登山界からの批判 難関ルートへの選択に対する批判と「映像配信」「冒険の共有」への批判

第8章 前人未踏の地なき時代の冒険・探検……………236

6 栗城の冒険が示したもの 233

——角幡唯介と「冒険を書く」という行為・情報テクノロジー——

1 未踏の地なき時代の冒険家・探検家 236

冒険・探検の地を見つけることの困難 二〇一〇年代の新しい冒険・探検のあり方

2 角幡唯介の登場 239

角幡唯介とは 探検家・ノンフィクション作家としての地位確立 「追体験」の重視

「極夜行」と「新しいタイプの冒険」を構想すること

3 冒険の「行為者」と「表現者」（書き手）の関係 245

冒険の実践とその「表現」の関係 当事者以外の人間が描く「冒険」 「行為者」と「書

き手」の緊張関係

4 ライターとしての角幡 251

学術論文に近い記述形式 卓越した文才への高評価 エッセイ集の発刊へ 家族・愛

娘を描く角幡とその「熱量」

5 東日本大震災と角幡の冒険 259

「非国民」な冒険家 冒険的な「震災体験」と「身体性」を伴うナラティブ

6 「教養」への憧れと「冒険を論じること」 265

冒険に対する考えとその変化 「教養」や「正当性」に対するコンプレックス

7 情報通信システム技術の浸透と「冒険の意義」の創出 271

角幡にとってのGPSと身体感覚 GPSをもたないことの「現代的意義」 衛星携帯

電話と「脱システム」への大きな壁 「脱システム」できない物語の逆説的な魅力

8 角幡の冒険とは 279

あとがき

関係年表

289 285

人名索引

初出一覧（これ以外は書き下ろし）

第4章…「国民的英雄・植村直己の誕生——「自分探し」と「メディア・イベント」のはざままで」福間良明編
『昭和五〇年代論——「戦後の終わり」と「終わらない戦後」の交錯』みずき書林、二〇二二年。

第5章…「川口浩探検隊シリーズ」と「真正性」の変容——テレビ時代のスペクタクルな冒険・探検」鈴木康
史編著『冒険と探検の近代日本——物語・メディア・再生産』せりか書房、二〇一九年。